

## 北見地域における医療介護連携と北まる net の活用

報告者 ヒューマンネットワーク部会担当副会長  
関 建久 (道東脳神経外科病院)

地域包括ケア実現のための方法として北見市を中心に運用されている「北まる net」の概要と仕組みについて、医療介護現場の方から活用の利点と課題について3名の方から報告して頂いた。以下に報告について簡単にまとめました。

### ■北まる net とその運用状況

北星脳神経・心血管内科病院の田頭剛弦さんからは、昨年10月から運用された北まる net の概要と安全性、そして現在の登録者数について報告して頂きました。

医療機関と介護事業所間の連絡のやり取りし紙、電話やFAXなどを従来は用いていましたが、これらの情報が電子化されることによって、関係者にとっては情報の量が増え、互いの労力が減ること。また利用する患者さんや介護サービスを利用するにとっては、ご自身の情報が関係者に理解してもらえると安心感がもたらされると説明がありました。

### ■北見赤十字病院における地域との情報連携

北見赤十字病院の医療情報技師の河野洋樹さんからは、北見赤十字病院における地域連携における役割、医療情報連携システム、そして今後北まる Net との融合について報告して頂きました。同院は管内で唯一地域医療支

援病院であり、かかりつけ医と専門治療の役割分担を進めています。これを繋ぐ情報連携として医療機関相互で既に運用されている「病院連携システム」を紹介して頂きました。来年以降、順次新病院が完成していきませんが、病院と介護事業所を結ぶ北まる net との融合も視野に入れ進めたいとの見通しを示して頂きました。

### ■地域における助け合いと高齢者介護の現状

北見市保健福祉部の長尾智美さんからは、地域における支え合いと高齢者介護の現状についてご報告いただきました。高齢者2人のみ世帯が総世帯数の11.7%になり、とりわけ単身の高齢世帯が大きく増加していることが示されました。また65歳以上で介護認定を受けている割合は平成22年度に全国平均を追い抜き18.3%となっています(全国平均17.5%)。さらに要介護の原因となる病気の第2位が認知症となり、多くの要介護者がこれから生まれます。この課題を解決する一つの方法として、地域における助け合いの取り組み状況が報告されました。町内会、住民協働組織による声かけ、見守り、除雪、交流や災害時の支援。あったか・サポーター養成講座履修者による、いきいきふれあいサロンが市内に21か所設置され、これからの高齢者同士の支えあいのきっかけになって欲しいと報告がありました。

### ■まとめ

助言者である厚生労働省の逢坂氏からは、情報伝達の道具を上手に活用する事はとても重要であり、市民も関心を持って欲しい。また今後は少ない人手で医療と介護のサービスが不足することは目に見えているので、病院、介護事業所や行政任せにせず市民も声を上げるべきというエールを頂きました。

パネルディスカッションのまとめとして以下のことが確認でき、有意義な時間となりました。

- 高齢者増、若者減少の超少子高齢社会を乗り切るには、今までのやり方は通用しない。医療・介護機関と行政だけではなく、市民も積極的にかかわるべきである。
- 高齢者自身の健康維持はもちろんだが、地域の担い手としての必要性が高まる自覚を持つ。
- 若者減少を補うため、医療と介護が少ない労力で提供される ICT（情報通信技術）の活用が不可欠である。

来年も同様の取り組みを実施して参ります。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。